

会員報告 第7班 平成23年4月23日(土)～5月1日(日)

○会社名 株式会社近藤組 (報告会発表文から)

参加した方 (5人: ^{はまむらしんじ}濱村真二 ^{いそがいまさし}磯貝将志 ^{さかいかつとし}酒井勝年 ^{さかいとしかず}坂井利一 ^{さかいけいいち}坂井慶一

の皆さん)

私ども7班は、宮地工業さん、丸洋建設さん、近藤組、吉田建設さんという4社で出動したわけですが、たまたま我が社は行った日からすべて待機でして、出動準備ということもありまして、今までご苦労されて発表された方の発表とはちょっと違う角度からの報告になると思いますけども、一つの報告として聞いていただければ助かると思いますので、よろしく願いいたします。

4月23日(土曜日)から出発しまして、外気温は15度から20度くらいでした。少し肌寒いかなということで、天候には恵まれました。

前任の方からいろいろ情報もありまして、私どもも原発回避ルート、また東京を迂回するルートということで、約750キロ走行しまして現地に入りました。交代で運転していきまされたけれども、正直なところ思った以上に遠いなという感想はあります。

道中ですが、福島県に入ったあたりから、高速道路の段差、ひび割れ、のり面崩壊が見受けられました。また、民家の瓦等の損傷が激しく、被災の大きさを感しました。

原発等の影響範囲とか風向きによってだいぶ違ったり作業内容、方法等、現地に行ってみなければわからないことばかりでしたので、その場その場での状況判断が非常に大切であると思ひまして、作業員さんの安全確保が最優先だと思ひていた私には身の引き締まる思ひでした。

派遣予定期間は、前日から基地の愛子防災センター付近に宿が取れまして、私どもの見渡す限りでは被災地に来たという感覚は全くありませんでした。私どもが行った時期は、ガソリンスタンド、コンビニ等は平常どおりに営業していました。

しかし、毎日のように小さな余震がありましたので、私も含めて作業員もだんだん危険を予知する感覚が薄れていっているな、ということはありません。

派遣期間中、すべて出動準備命令でしたけども、自分たちで仙台空港付近に行ってみました。海沿いのボックスをくぐった瞬間に、テレビ等の映像のと通りの別世界でした。本当にこれが日本なのかと私自身も言葉を失って、後から考えればボックスから流れ出た少しのゴミが残っただけで、ゴミが少なかったので、行ったときはだいぶ復旧が進んでいるかと思ひましたけれども、高速道路のボックスをくぐった瞬間、仙台空港あたりもすごい状況でしたので、言葉をなくした覚えがあります。

全体を通じて、小さいことかもしれませんが、被災地で少しでも役に立ちたいと思ひたのですけども、一度も出動することがなく非常に残念に思ひています。現地でも1度だけ排水ポンプ車の移動の要請があったのですが、そこには多くの排水ポンプ車、照明機、各地から集まった業者の方々がいまいましたので、現地でも指示を出される方も、決定される方も非常に大変なことだと思ひましたけれども、先ほど徳倉さんからもありましたけれども、独自でボランティアをやっているものかどうか、要請があった場合はすぐ行かなければ

ばならないということもありましたので、本当に何をしたらいいのかということで日々自問自答しているところでした。

今回感じたことは最終的に2点あります。現地の情報が少ないが故に困惑することや、また誤った情報、現地へ行ってみたら違っているという情報が多かったかなと思いました。

帰還命令に伴って、通行料をどうしたらいいか、燃料をどうしたらいいかといった、そういう細かいことを誰に確認すべきなのか、どのような処置がよいのかという伝達系統、縦も含め、横も含め、伝達系統の大切さを改めて痛感しました。

そのような体験や感じたことは様々だと思いましたが、本当の緊急時は問題ばかりで、思っている半分もできないのではないかと思ったり、また、前もつての準備ができるように、会社や現場に持ち帰って日々の管理に努めたいと思いました。

○会社名 宮地工業株式会社 1

参加した方（4人：あだちかつのり足立勝徳 やまぐちしょうじ山口祥治 ののやまさまみ野々山政美 みやがわやすのり宮川康則 の皆さん）

中部地方整備局さんにお願いです。

私ども、排水ポンプ車を現地から駐車場まで持っていったんですけど、そのときに会社から現地まで行くには有料道路の通行証を発行していただいたのですが、肝心の排水ポンプ車には無料通行証がなかったんです。それで、名古屋から来ていると言って向こうの人にはわかってもらえたんですけども、私どもが持っていた通行車両証では通行ナンバーが違うものですから、これはやっぱり通せませんよということで現金を払って帰ってきたんですけども。

次回、もしこういう機会があれば、待機車両、排水ポンプ車、電源車には、せっかく行くのだったら無料の通行証をセットしてもらえるとありがたいと思って帰ってきました。以上です。

○会社名 宮地工業株式会社 2

発生時、橋りょう作業中に大きな揺れを感じてからも、なかなか治まらない時間に不安を覚えました。帰宅し報道を目の当たりにして驚愕しました。又、地震の大きさも然ることながら津波の凄まじさ、安全と言われた原子力発電所の爆発事故、それに伴う放射能漏れ、大変な事態と感じながらも、現地での復旧応援は現実厳しいと感じていました。社内でも現地派遣があれば手を上げると言っていました。現実になるとは思ってもいませんでした。

翻って思えば、愛知県建設業協会から応援依頼らの1ヶ月間は貴重な体験でした。

人選から帰還までの感想、困ったこと、提案をまとめて今後に生かすことで、再び派遣要請があった時にはもっと手際よく応えられるよう準備し、現地においても被災された皆さんから頼りにされるようがんばって復旧に協力したいとの思いでした。

派遣人選に当り、心構えはできておりましたので受諾し家族に連絡したところ放射能が飛散しているところにどうして行かなければならないのかと言われてましたが、孫の一言で一

変。社会貢献できるチャンスはなかなか有る事ではないので気分よく送り出そうと雰囲気を変えてくれました。

最悪の状況を想定し食料の準備では、3食と夜食の用意に奔走し、満載で出発しましたが現地調達ができ、あまり利用することもなく持ち帰って来ました。

交通手段では検討の結果、車内泊を考慮し大型ワゴン車を手当てし、放射能汚染を避けるため日本海ルートで10時間を掛けて宿舎に夜間無事に到着しほっとした1日でした。

明日からの活動を思い全員深い眠りにつきました。

作業は、荒浜第二排水機場での排水作業に固定され北陸地整からの業者と同時作業でしたがトラブルもなく安全に業務に専念でき多少の貢献ができたかと思っております。

中部地整の担当者も日々状況確認で視察され適切な指示、配慮など心強く思いました。

業務後半には、駐車場での待機指示待ちのなか公園内での昼食は息抜きできる気分でした。

又、待機車両の多さにびっくり、何とかならないのかと思いました。

提案として終日待機が確定しておれば、ボランティア活動等貢献できれば意義があると思いました。

宿泊では、毎日宿の確保に奔走し、亀裂の入ったホテルでの宿泊、余震での揺れの大きさも実感しました。宿が確保でき食事、風呂、横になって休むことができたので疲れも吹っ飛び体調不良を訴える者もいませんでした。

任務を終え、全員無事家族の下に帰ることができ安堵、労いの言葉もありました。

経験を生かし災害復旧活動の要請があれば参加します。

○会社名 丸洋建設株式会社

参加した方（4人：^{すずきたつや}鈴木達也 ^{いながきじゅうし}稲垣寿司 ^{さかた}坂田 ^{しのぶ}忍 ^{みつやみつはる}三矢光治の皆さん）

東北災害支援依頼にあたり、我々は是非にと志願した。実際に我が社に決定するまで皆不安があったが、いざ我が社に決定されると、それぞれ家族の協力も得て士気を高めた。

4月23日の出発日集合場所の会社には見送りしてくれる社員の姿があり、とても勇気づけられたのを思い出す。準備は愛知県建設業協会さんのご指導もあり、1週間車泊できる装備をそろえ万全を期した。現地の宿泊予約は懸念されたが事前に現地旅行代理店と連絡がとれ、日々変わる派遣地であるという条件を現地担当者さんが奔走され特別の配慮によって、宿の仮押さえも完了できた。ただ、派遣地によっては“出たとこ勝負”であるとのことだった。往路は福島原発回避奨励ルートを選択し、愛知から長野、新潟、山形を經由し約12時間かけ宮城へ入った。震災後約1ヶ月半後だからだろうか、出発前に心配された給油環境はよく高速道路も規制なく順調だったといえる。

4月23日愛子ステーションにて続々と災害支援部隊が集結し、自己紹介も兼ねみなさんと話をしたが、皆とても士気が高く気持ちがとても高揚したのを思い出す。当局より事前説明を受けたが“待機指示”であったので少し残念に思ったが、ただ、我々は第4陣であったし、事前に先遣隊よりある程度の情報は得ていたのでこの士気を維持していくよう一緒に来た同僚と話をし、派遣に備えた。

待機中は当局より“被災地を見るのも勉強である、ただし被災者感情には十分配慮するように”との事であったので時間を設け被災地へ車を走らせた。仙台市内は道路の段差、亀裂がみられたもののほぼ平時と変わらない印象を受け驚いた。車を海岸（若林区）方面へ走らせるとその状況は高速道路を隔て一変し、見渡す限りがれきであった。「これが津波か！！」と皆驚愕した。ほんとに何も無い状況に愛知県沿岸部に住む我々としては他人ごとではなかった。建設業者として「何かできる」と皆奮い立ったが、現実何もできない状況にジレンマを感じた。震災後1ヶ月半の時点で諸事情もあろうが、やはり重機と運搬車両が少ないと感じた。宿に帰り地方紙に目を通すと米軍が仙台空港の復旧作業にあたった記事を読んだが最前線精鋭部隊が作業に当たり“撤収時には自分たちの出したゴミを何一つ残さず去っていった“という記事に感動を覚えた。教育と一糸乱れぬ指示命令系統が完全に確立されているのだろう。被災地にはたくさんの自衛隊員も作業にあたられ敬服した。大事にはやはり危機管理と組織だなと実感しやがてくるであろう東海・東南海地震に備え事業場、作業場にて有事においての指示命令系統を真剣に見直すいい機会だと思う。

最終日まで待機であったが、なにも出来ない無念さはあったが、“東北をみた”という経験をこれからの有事にぜひ役立てたい。 いや役立てなければならない。

○会社名 吉田建設株式会社

参加した方（2人：^{たなかきよみち}田中清道 ^{ごとうしげお}後藤繁雄の皆さん）

3月11日の震災発生後から1ヶ月が経過した4月23日から5月1日までの業務期間で仙台宮城への復興支援に行き参りました。

4月23日土曜日朝から雨が降りしきる中会社が休日にもかかわらず、社長始め、大勢の社員に激励を受け会社代表として約10時間かけて現地集合場所（愛子防災除雪ステーション）へ到着しました。県内から同じ業務の3社も道中で合流し、同じ業務を達成する者同士、意気投合し現地へ赴きました。

集合場所にて打合せの際、中部地方整備局現地担当者より「待機命令」がでました。

その理由として、現地での作業進捗が非常におくれており堤防を大型土嚢で仮締切を行っておりそれが終わり次第順次現地での作業に携わってもらいますとのことでした。

4社の内1社が当日すぐに現地入りし、排水ポンプ車の業務活動開始となり、残った3社も現地へ応援へ行き作業を行えば、一気に片づくのではなかろうか？という思いは皆同じ気持ちでいっぱいでした。

みちのく杜の公園での待機状態が4日間続き毎日会社の上司・愛知県建設業協会に現況報告のメールにはいつも「本日の業務待機、異常なし」の文章が繰り返される日々でした。

このまま次の後続隊への引継ぎまで、待機で終了してしまうのか、俺たちは何をしに東北まで来たのだろうか、出発の際の激励は一体なんだったのだろうか、そうゆう嫌な気配が脳裏にただずんできた。せめて1日でもいいから現地で行い、業務達成感に浸りたいという気持ちでいっぱいでした。

そんな中、中部地方整備局の方の図らいで支援業務にこられて1度も現地へ赴いていない

業者を対象とした合同演習会が設定され、現地で排水ポンプ活動がされている地区へ研修に行きました。研修に参加するにあたり打合せの際、中部地方整備局の管理職の方より、「待機も立派な業務の一環です。皆さん誇りをもっていただきたい」という言葉を聞いた時は心の中の不安が吹っ飛びました。

後に私たちは石巻市釜谷地区（北上川河口付近）へ出動要請があり、2日間ではありましたが照明車の点灯運營業務を努めました。

東北地方整備局所有のクローラー式排水ポンプ車は通常のポンプ車が行けない場所でも進入して排水ができるという面で中部地方整備局もこのポンプ車を導入すれば、今後予測される東海地震他異常気象による河川の氾濫等に多大なる活動ができると私は確信できます。最後に、この釜谷地区には全校児童の7割の児童が津波に巻き込まれた大川小学校付近での作業であり、献花台にはたくさんの花が掲げられていた。また日中には多くの消防隊、警察隊、建設業者がガレキの片づけ、仮設堤防道路の築堤、行方不明者の捜索が血道に行われており、なまなましい光景が目には焼き付きました。

1日でも早く行方不明の方の早期発見、家族のもとへ引渡しができる様、心からご冥福をお祈り申し上げます。

併せて東日本大震災復興活動に現地に赴いた一人として1日でも早い復興を願っています。

（各社の活動）

